



Temple Hotel 観音院

毎月24日、「日限地蔵」の縁日では桐生の風物詩として賑わいを見せる観音院（月門快憲住職）。人々の心のよりどころとして親しまれるこの寺院に、今年10月1日、宿坊「Temple Hotel 観音院」がオープンした。東京都港区で「お寺ステイ」を運営する㈱シェアウィングとの共同経営で、同社が手掛ける宿坊施設としては、飛騨高山の高山善光寺、東京・田町の正伝寺に次ぐ3軒目である。

宿坊は本堂からつながる建物が宿泊施設に改修され、美しい中庭を囲むように2部屋が配される。「織の間」は和室で定員4名。客室には枯山水の石庭に露天風呂が付く。「染の間」は洋間でクイーンサイズのベッドとソファベッドがおかれ、定員は最大4名まで。どちらにも専用のシャワールームとトイレが備えられている。客室に加え奥座敷を貸し切ること最大16名まで滞在でき、合宿や展示会などのイベント会場としても利用できる。また、食事の提供はないが共用のキッチンとダイニングが設けられ、簡単な炊事ができるほか、桐生の観光情報やQRコードで近隣の飲食店情報も取得でき、食事は地場のものをとってもらよう勤めている。

宿坊全体は木のぬくもりが包み、優しさとしんじさが溶け合う洗練された空間となっている。コーディネートは、桐生の暮らしとまちをつなぐ活動を続けるグループ“small”が担当。TEXTILE&CRAFTをテーマに、桐生の最旬ブランドやクリエイターとのコラボレーションが実現し、開山から370年の古寺が持つ伝統美とものづくりの文化が根付く桐生の今が融合され、新旧の「桐生ならではの」が具現化されている。

現代人の宗教ばなれや少子高齢化など、全国的に寺院を取り巻く環境は厳しい。月門住職は「桐生の活性化が観音院の活性化につながり、観音院の活性化が桐生の活性化につながれば」と宿坊による地域づくりへの想いは強い。宿坊の非日常体験がインバウンドの取り込みにも期待され、信仰の場であり人々が集う交流の場として、新しい桐生の玄関口が寺院本来の機能と価値を令和の時代に改めて照らす。



“非日常を贅沢に味わう
桐生ならではの
がもてなす宿坊”

- 場所／桐生市東2-13-18
- HP／<https://oterastay.com/kannon-in/>
- 予約サイト／<https://www.airbnb.jp/users/291217350/listings>

